

【翻 訳】

『私の心の底で』

（ウィリアム・スタフォード）

島 田 桂 子

翻 訳

『私の心の底で』
(ウィリアム・スタフォード)

島 田 桂 子

Keiko SHIMADA

<解説>

ここに翻訳したものは、ウィリアム・スタフォードによる散文*Down in My Heart*の序文、プロローグ、最初の章である。

ウィリアム・スタフォード(1914年-1993年)は、歴史的平和教会として知られているチャーチ・オブ・ザ・ブレザレンに属するクリスチャンであり、生涯にわたって平和と和解の推進に取り組んだ詩人である。

彼は第二次世界大戦中、宗教的・良心的信念から兵役につくことを拒否し、1942年から46年までの4年間、良心的兵役拒否者(CO)のためのキャンプ(収容所)で過ごした。彼は敵を殺す代わりに、アーカンソーやカリフォルニアのキャンプで、山火事の消火活動や、植林、道路作りなどの作業を行った。良心的兵役拒否者は、しばしば「臆病者」、「売国奴」と蔑まれ、スタフォード自身も愛国者たちの手によって殺されそうになったこともあった。しかし、たとえ周囲の多くの人々が激怒や恐怖感を示すときでも、和解や一致のために証言することが重要であると彼は信じていた。その思想は彼の膨大な詩と散文に息づいている。

Down in My Heart『私の心の底で』は、もともとカンザス大学に提出されたスタフォードの修士論文であったが、その後

1948年に彼の初の著書として出版された。これは、作者の実体験に基づいたCOキャンプでの生活の様子を綴った散文であり、人名など一部フィクションも交えた詩的な戦争の記録である。スタフォード自身と思われる語り手が、かつての収容所仲間であるジョージに収容所での出来事を語り聞かせるという枠組みになっている。

この物語の最終章では、ジョージが収容所を勝手に出所したために逮捕され、投獄されるエピソードが語られている。ジョージは、アメリカ政府が「殺そうとしない人々を投獄し続け、殺す目的で人々を徴兵し続けている」ことに抗議し、独房でハンガー・ストライキを起こす。物語が始まる前の「プロローグ」には、語り手が、ハンガー・ストライキを起こして死にそうになっているジョージに(ここでは、そのような詳しいジョージの状態については書かれていないが)物語を語り始める場面が描かれている。ジョージはこの散文の主要登場人物であるだけでなく、彼に向けてこの物語が語られる形態になっているのである。

年代的には、いわゆる「告白詩人」と呼ばれるロバート・ローウェル、ジョン・ペリイマン、デルモア・シュオーツなどと同世代であるが、スタフォードはそれら精神的病を抱えた詩人たちとは違い、その人物と詩は穏や

かな平静さに満ちている。彼らと同じように〈疎外〉を体験した Staford であるが、なぜ彼の詩と生き方は彼らと対照をなすように違うのか。CO キャンプでの体験が、詩人としての Staford に大きな影響を与えたことを考えると、この作品をじっくり読み解くことで、その疑問に答えるヒントを得られるに違いない。Staford を知るには、この作品は非常に重要なのである。

< 翻訳 >

序文

第 2 次世界大戦中、公に戦争に反対して戦闘に加わることを拒否した私たちは、よく孤独を感じていた。そして別れを告げて家族のもとを去り、収容所あるいは監獄へと向かった。徴兵年齢であった私たちのうちのおよそ 12,000 人が CPS (民間公共事業) と呼ばれる兵役に代わる活動に就き、およそ 5,000 人が監獄に送られ、不特定多数が国軍と共に非戦闘員としての任務に就いた。公に兵役を拒否した私たちは、自分たちの国が一夜にして征服されてしまったのだと悟った——どの街角でも、どの建物でも怒鳴り声を上げ、どの外国人に対してよりも私たちに対して激しい怒りと憎悪を浴びせる見知らぬ人たちによって征服されてしまったのだ。私たちの知っていた国はもう無かった。完全に消えてしまっていた。爆撃で壊滅してしまっただけだ。その爆撃は、私たちが生まれるずっと前から長年建っていた歴史遺産を抹消してしまった。

(「私は平和ではなく、剣をもたすためにきたのだ…」と聖書にあるように) 私たちの多くは家族と仲たがいで、「兵隊さんとはとても素敵…」と唄にあるように) 妻や恋人と疎遠になってしまった。私たちは、一人二人と集められ、古い市民保全部隊キャンプや教会機関の共同管理施設や、林野部や土壌保全部のような行政サービス機関へ送られた。

収容所の宿舎で目覚めて、自分たちが追放され、失われ、札を付けられ、見捨てられ、法的保護を奪われ、ほとんど異邦人も同然であることに気づくと愕然とした。今まで理解していた話は、悪夢のように変わってしまった。単語や文章や節は理解できたが、話の意図や手順や結論を理解することはできなかった。私たちを擁護してくれた人々の話でさえ理解できず、当惑してしまっただけだ。ある意味で、私たちが彼らを守っているのだと思っていたので、感謝の方向が全く混乱していたのだ。

それでも私たちは自分たちがよそ者ではないことをずっとわかっていたし、あの歴史遺産がいつかは再現するだろうということもわかっていた。私たちはその歴史遺産の思い出にしがみつき、自分自身や友人たちにそれを思い起こさせ、ほんの小さな事の中にそれを見つけるとは喜んだ。私たちを管理していた政府の役人たちは、人道的な親切心と強制収容所を運営しなければならないという気乗りしない考えの間で苦しんでいたが、彼らとの個人的な関係の中にその歴史遺産を見つけて私たちは喜んだ。

私たちを社会の一員としてくれていたその歴史遺産とは、自分自身や他者、しかもすべての他者のために私たちが尊重するようになった、ある交わりの要素であった。そこで、私たちはいたるところで他の人間を探し、交わりの機会を探した。あちらこちらで少しずつ交友を見つけると、さらにそれを期待し、それを分析し、その先行する出来事と結果を追跡した。心の奥底で私たちはそれを見つけ、どんな地理的な同族関係や国民としての忠誠よりも重要なものとして——そもそもそれらの前提条件となるものであるが——それを保護し促進させたいと思った。戦争の勢力は絶えず失望や敵意を駆り立て、それらは簡単に人的反乱となっていく。しかし私たちにとって他の人間に対して反乱を起こすことは、私たちが戦争の原因とみなしている勢力

に降伏することになる。これは危険を引き起こすものだと私たちは痛烈に分かっていた。身近な社会の大きな暴力に加担しないためには、つまり、より大きな社会に忠実であり続けるためには、隣人の反感を買うようなやり方で行動しなければならないことを分かっていたからだ。

戦争が終わった今、私たちが抱えている問題は、他の人々、特にどこであれ、どんな理由であれ徴兵された人々が抱えている問題と同様であるように思える。戦争中、自分が日常のしたいと思うことをすることを妨害され、自ら望んだこととはかけ離れたことを行うよう命じられた多くの人々が、今再び自由となったが、まだ精神的に不安定な状態にある。彼らは精神的に不安定であるために、他人に対して責任を果たそうとすることができず、さらに孤独になってしまうのだ。私たちは、自分の決断に基づいた生活を送ることができるということ、そしてその生活パターンは毎日の暮らしの信頼できる一部となりうるということ、もう一度学ばなければならない。ルイズ・ボーガンは、戦争以前に私たちが感情的に持ち得た価値観や心情を再び実感する必要があると書いている。フランスのシジル・コノリーは、フランスにおける問題を鋭く見ている。彼によれば、フランスは神経衰弱を患っており、フランスは何を意味すべきか、何をすべきか、どうなるべきか、誰も分からない状態だという。

歴史遺産を追跡しようとした私たちの試みについてこれから報告するが、この報告が他の人々の試みの助けになることを望んでいる。とくに、どんな理由であれ、どんな立場であれ、徴兵制の下で兵役に就くことを強制された人々の助けになることを望んでいる。

私は1942年1月に宗教的兵役拒否者のためのCPS収容所に入り、4つの収容所を経て、1946年に出所した。収容所の状態や業績に関する詳細については、わが国の法律

や様々な報告書を調べていただければ分かるだろう。私の報告は、一連の出来事についての報告であり、それは兵役拒否者の生活の特質を伝えるために意図的に構想したものである。私たち兵役拒否者には給料が支払われなかったということを知ること、私たちの境遇や家庭のやりくりや日常の心配事について多少お分かりいただけるだろう。平和教会、主にブレザレン教会、フレンド派教会、メソナイト教会が、収容所の維持管理費を支払い、月2ドル50セントの私たちの生活費を賄っていたのだ。

最後に、私たちの立場に対する賛否の主張がここに記されているかということについて。その主張は他のもっと大きな本の中で、おそらく記録天使によって著わされる本の中で、なされるべきだろう。

プロローグ

ジョージ、今夜は多分長い時間、君のベッドの側に座って、静かに語りかけるよ。またいつ機会があるか分からないからね。僕の声が聞こえるのかどうか分からないけれど、聞こえることを願って、話し続けるよ。

外は暗くなってきた。道沿いの木々もほとんど見えなくなって、病院の門の近くの明かりがついているよ。街を出た時には雪が少しちらついていたけれど、今も降っているのかどうか分からない。病院中が静かで、この階の責任者が僕に好きなだけいいと言ってくれた。これはめったにないことだと彼は言っていたけれど、病院では君の症状をどう判断していいのかわからないらしい。君が食事をとってくれさえすれば…でも、そのことについては何も言わないよ。その人が言うには、君が何とか生き続けられるだけの食事は与えているということだけれど…でも、そのことについては、もう何も言わないよ。

ジョージ、戦時中に僕たちに起こったこと

を題材にして僕が作った物語を、君がちゃんと分かるように話したいと思う。この話が君に聞こえるのかどうか分からないけれど、果たして誰かが将来聞くことがあるのかどうか分からないけれど、このことは言いたいんだ。僕たちは——君と僕と他の数人の者たちは——失われた者たちで、他のほとんどの人々には経験できない事、僕たちを沈黙させ、静かに僕たちを巻き込んでいった大きな出来事を僕たちは見たのだから。

ゆっくり話すからね、ジョージ、そうすれば聞こえるかもしれないからね。君は主人公の一人だから、物語を聞いて僕と一緒にあの頃をふり返ってほしい。外はもう暗いよ。1942年の春のことだ。風が吹いている。

マックニールでの暴徒事件

「暴徒がやってきたら、友好的な反応で彼らを驚かせてみるべきだと思う——コーヒーとクッキーを持って行って、彼らを出迎えるんだ」とジョージはよく言っていた。

「僕なら」とラリーは言った。「頑丈なストーブ用の薪を取って、ドアの陰に隠れて、やつらの頭をぼこぼこにしてやるさ。それが彼らに必要なことだよ。」

「どうかな、みんなの考えは良く分からないけど」とディックは言った。「僕はすぐに裏口から逃げて藪の中に隠れるよ。誰にも僕の死のせいで良心が咎めるようなことになってほしくないからね。」

人はどんな場合に獐猛になるのか。ある日曜日の午後、私たちはアーカンソー州マックニールの駅の近くの日向に座って、安息日の穏やかな雰囲気の中でぶらぶらと過ごしていた数人の男たちと楽しくおしゃべりしていた。ボブは水彩画を描いていた。ジョージはメモ帳に詩を走り書きしていた。私は『草の葉』を読みながら時々目を上げては、その場

の様子を楽しんでいた。

人はどんな場合に獐猛になるのか。1942年3月22日のことだった。収容所の果樹は花盛りだった。私たちはハイキングに出かけ、果樹園を歩きながらその花を眺めたり、しばらく立ち止っては、私がジョージとボブを二頭の小さな子牛と共に写真に収めたりした。松林の中を通り抜け、傾いた家々を通して歩きながら、戦争や収容所や日曜日について語り合った。私たちはその辺りの土地についてはよく知っていた。収容所に来てからの数ヶ月間、私たちは収容所の小道の脇にある畑で土壌保全の仕事をしていた。すべての人が友好的だったわけではなかったのは事実だ。私たちの事業監督は、黒人には「ミスター」とか「ミセス」を付けて呼ばないようにと警告していたが、私たちはその敬称を使い続けた。ある嵐の夜、医者は誰も来てくれず、収容所の男たちの数人が、ある黒人女性の応急処置を施した。彼女の夫が彼らを暗い森の中を抜けて妻が苦しんで伏せている小屋へと案内したのだった。こうして私たちは近所の人々の一部と親しくなっていた。親しく付き合うことができた隣人もいたが、なかなか親しくなるのが難しい人たちもいたので、街に行く時には人目に就かないように用心して一度に二人だけで出かけた。私たちはその土地ではほとんどの場合、物静かで周りに気づかれていないと思っていた。

私たちがマックニールまでハイキングに出かけたとき、数人の男たちが日陰にたむろしていた。商店は閉まっていた。大通りが駅から各方向に1区画延び、そこから、家が散在している間を曲がりくねる緩やかな砂の道へと続いていた。私たちも日曜日の午後ということもあって緊張がほぐれていた。ボブは画板を準備し、ジョージはメモ帳とペンを取り出し、私は電話柱に寄り掛って本を読み始めた。危険な男たちに囲まれているとは気づかずに…。

自国の同胞の群れに襲われるという事件は、不運と不注意なミスが次々と重なって起こった非常に複雑な出来事であり、無事に切り抜けられたことはその不運を帳消しにするくらい幸運なことだったので、この点では、そのエピソードを語れるというのは、その主題の観点から見ても、自分は稀有な人間だと思う。しかし、私たちがどうやって襲われ始めたのか、どこで不注意なミスや不運が始まったのか、それを語るのは難しい。ボブが芸術家でなかったら、あるいは、とくにジョージの詩がなかったならば、私たちは平穏な安息日を過ごしていたかもしれない。一方で、もしウォルト・ホイットマンの詩がもっと韻を踏んだものであったなら、私たちはアーカンソー州のリンチ事件死亡者記録の数字となっていたかもしれない。

町民の約8人が集まって、ボブが絵を描いているのを肩越しに見ていた。彼の絵の題材は通りの向こう側の荒廃した店だった。男たちは友好的に興味深かそうに見ていた。私はこの町について彼らにいくつか尋ねた。私たちがぶっきらぼうな態度をとったのは、彼らが私たちにどこから来たかを尋ねたときだけだった。ボブが「マグノリアさ」と言って、急に町の野球チームのことに話題を変えた。傍観していた者の一人がジョージの背後ににじり寄って来て、彼の肩越しから覗きこんだ。ジョージの方は、周りに注意を払わずに、せせと詩を書いては直すという作業を続けていた。

私は再び本に目を移したが、読んでいたかどうかは決して思い出せないだろう。その時、事件は起こった——「さあ、私がおその大陸を不変にしよう…」

私は目を上げた。先程の傍観者が——彼はハンサムな若者で、身なりも良く、鼻筋の上の皮膚は引締まっていたが——ジョージの詩をひたたくって、読んでいた。

「こんなことを書くなんてどういうつもり

だ」と彼は食ってかかった。「この町が気に入らないなら、この辺に来る権利は無いぞ。」彼の声には聞き慣れた鋭さがあった。彼は私たちが兵役拒否者であることを知っていたのだ。

ジョージは、両手を下げたまま、冷静な顔で真っ直ぐに立ち上がり、その詩は他人に読んでもらうつもりで書いたわけではない、ただ書こうとしただけで、自分の気持ちを表現しようとしただけだと抗議した。

「さあ、その詩はいらないよ。捨てるから返してくれ」とジョージは言った。若者は、ジョージの伸ばした手から詩を遠ざけ、その発見物を数歩離れたところへ持って行き、もう一人の町人に見せた。二人は何やらぶつぶつぶ言っていた。最初の男が戻って来た。今度はボブの絵をじっと見たが、ジョージと私はじっと動かずに立ったままで、ボブは絵を描き続けた。少しペースを速めて…。人が危害を加えそうなときに何ができたであろう。

その若者は直接私たちにではなく、他の町民たち（その一部は近くに寄って来ていた）に向かって私たちが兵役拒否者であることを話した。さらにはぶつぶつぶ言う声が沸き起こり、その中に刺激するような言葉、「憶病者」とか「こんちくしょう」という言葉が聞こえ始めた。初めのうちは、私たちについて、彼らは互いにそんな言葉を言っていたが、やがてその言葉が発せられると顔がもっとこちらに向けられた。背の低い、頑丈な男が行動に出た。彼はボブが座っているところへ行き、画板をさっと取り上げた。

「あなた、何をするんですか!」とボブは言って、驚いたように見上げた。

「これは俺たちが預かるよ」とその背の低い男は言った。彼は画用紙を画板から剥ぎとり始めたが、別の男が彼を止めた。

「それは証拠にとっておけ。」背の低い男は、駅の近くに柵のように取り付けられた鉄の手すりや画板を叩き壊そうとして、頭上高く画

板を持ち上げたが、彼は手を止め、よく考えて、その画板をなで、それを脇に抱えて証拠として守ることに決めた。

「その板はやつらの頭で叩き割ってやるべきだ」と誰かが提案した。他の数人もその考えに同調した。その言い方を変化させては、構想を膨らませ、それを伝える者たちもいた。「吊るし首にする」ことを言い出す者もいた。

ジョージが積極的な態度に出た。「僕は家に帰ることにするよ」と彼は言った。「ここには居てもらいたくないようだから。」彼は集団から立ち去り始めた。その時には15人ほどの人が周りにいた。

「おい、おまえ、どこにも行かせないぞ」と一人が言った。

「やつを行かせるな」ともう一人が言った。

ジョージは戻ってきて、座った。

集団の端にいたある男が——私たちにとって素晴らしい人だったが——「保安官を呼ぼう」と言った。今度はこの呼びかけが周りにこだました。実際に誰かが通りを渡って呼びに行ったので、私たちは大いに安堵した。しかし、緊張状態は少しも終息しなかった。

取り調べを始めたあの若者が私の方を向いた。「お前はなにをやっていたんだ。」

「私は本を読んでいました。」私はその本——『草の葉』——を持ち上げた。「詩の本です。」

「ポケットの中にあるそれは何だ？」と彼は私のシャツのポケットを指さして尋ねた。それは私が書いた手紙だと説明した。

「だが、お前は手紙を書いていたとは言わなかったじゃないか」と彼は言いがかりをつけた。男たちの集団は向きを変えた。私は、直前まで本を読んでいたが、手紙はそれ以前に書いたのだと説明した。その尋問者は手を伸ばして、手紙をよこせと要求した。他の人たちはこのやり取りを見ていたが、時々話をするために集団の端に退いては、また周りを押し分けて戻って来たりした。この時には約

25人の人がその場にいた。

当局が来るまで手紙を取り上げるのは待つべきだと私は提案し、例の尋問者はよくよく考えて提案を受け入れた。彼は立ち去ったが、今度は他の人たちと一緒にになってジョージを相手に彼の戦争についての信念について議論しようとした。ジョージはあまり語ろうとしなかったが、戦争は多くの人が良いと認める目的を達成するには間違ったやり方だと思うということだけを話した。

すると戦争についての議論の最中に、あの若者が向きを変え、ジョージが書いていたものは詩ではないと非難しはじめた。それが詩でないとすると、敵への情報のような、何か別のものかもしれないということをほのめかした。ジョージが書いたものは群衆の間で引切り無しに回し読みされ、それが通り過ぎるたびに怒りに興奮した騒ぎが起こっていたが、ジョージは自分が書いたものは詩であり、詩は韻を踏む必要はないのだと言った。この意見を聞くと、群衆の鼻息が荒くなった。詩は常に韻を踏むのだと若者は言った。脇に抱えた『草の葉』が震えたが、私は何も言わなかった。

口的一方を引き下げ、ジョージを横目で見ながら、若者は「いったいどの学校で学んだんだ」と言った。彼は私の脇から本を奪い取り、無作為にそれを広げた。彼は不機嫌な集団に向かってある一節を読み、その詩が韻を踏んでいることを証明しようとした。彼は自信満々に読み始め、徐々にゆっくりと読み、最後にパタンと本を閉じた。

「なるほど、これは詩かもしれないが、おまえの書いたものは違うな」と彼は言った。群衆は少し呆気にとられていた。彼らは向きを変えた。

この時には、まだ見ていなかったジョージの詩を肩越しに読むチャンスがあった。それは確かに不運にも、サンドバーグ調にマックニールを描写したもので、「マックニールよ!

まったく!大した町だよ、マックニールは…」という文言で始まっていた。警戒心を抱いたある傍観者が、「そして荷を積んだ貨物船は鈍い音を立てて夜の闇を通り過ぎる」という詩の一行に舌打ちした。

「ほら!」と彼は言った。「あれは情報だよ。あれは軍用列車のことだ!」ホイットマンのおかげで救われたことがすべて台無しになってしまった。

しかし、この時には一部の群衆はなぜボブが絵を描いていたのかについて議論していた。楽しみで描いていたという彼の主張を誰も理解できなかった。「それにしても、何のためにあれを描いているんだ?」と古い店の建物を指さして彼らは尋ねた。「外国勢力のために違いない」と一人が言った。

「外国勢力がマックニールのこの店の絵なんか使いませんよ」とボブは言った。そのボス訴追者はいら立った。

「そこがまさにおまえの間違っている点だよ、ボブ。国の支柱になっているのはマックニールのような小さな町だ。ヒトラーはそのことを良く知っている。」

ボブはその言葉の時代背景的な力に唾然とし、黙ってしまった。こうして大勢に取り囲まれて詰問されている間、私たちはただおとなしく礼儀正しくしていた。他にどうしてよいのか分からなかったのだ。私たちは、挑発者たちについて——そこには警察官も含まれるが——後に学んだことを、その時すばやく会得した。すなわち、迫害者というものはほとんど常に、さらなる圧力や暴力を加えるための口実として好戦的な反応を引き起こそうとし、そうすることができなければ困ってしまうということだ。

数分ごとに近くの停車場に車がやって来て、好奇心に駆られた人々がどっと出てきた。そのニュースは広がっていった。後で分かったことだが、私たちの周りに集団が形成され始めてほとんどすぐに、5マイルか10マイ

ル離れた町でもそのスパイたちの話が聞かれ始めたということだ。アーカンソーの人々は、ほとんどの詩人が望める以上の好奇心を持って、ジョージのドジを踏んだ詩をうなずいて読みながら、離れた場所で話していた。

とうとうマグノリアからパトカーが現れ、私たちは本当にほっとした。一人の警官が運転していた。地味な服装の男が、彼は連邦税務局の係官だったが、警官の横に座っていた。警察官は私たちに久しぶりに親切な言葉を掛けてくれた。

「あれはあなたの作品ですか」と彼はあの‘証拠’男がまだ手に持っていた絵の方にうなずきながら、ボブに尋ねた。「お上手ですね。」

二人の法の代表者が尋問を引き継いで、私たちの名前を聞き、群衆の告発を注意深く検討した。周囲の監視者たちの合唱によって、私の手紙は暴露された。税務局係官が注意深く手紙を読み、見物人たちは彼の肩越しに首を伸ばしていた。彼は新しい集団の方へ立ち去った。彼らは手紙を読んだ。役人たちは、証拠として監視者たちに押収されていた私のカメラを取り上げた。彼らは『草の葉』を取り上げた。警察官が、私たちが立っている車のところへ戻ってきた。彼は見られたり睨みかえされたりしても、じっと地面を見ることはなかったが、いままでそういう人はいなかった。

税務局係官は少なくとも30分は群衆の中を歩きまわって、地元の指導者たちに話しかけていた。襲ってきた集団は最も多くなったときには60人、あるいはおそらく75人はいただろう。納得できるすべての情報を得ると、税務局員は車のところへ戻って来た。私たちの救出者は——暴徒たちの目には私たちを捕える捕獲者と映っていただろうが——私たちを収容所へ連れ戻してくれた。パトカーに乗って宿舎を通り過ぎると、収容所は大騒ぎとなった。

暴徒事件は終わった。私たちの持ち物は、

絵と詩と私の手紙以外は戻された。絵と詩と手紙は、知りたがりの人々にあらゆる警戒策が講じられていることを納得させるために、マグノリアの警察所に陳列されている。収容所では危険を恐れて夜警の数を倍にしたが、何も起こらなかった。

次の朝、仕事の前に私たち3人は、集まった収容所の人々の前に立った。約100人の人々が様々な色合いのデニムやぼろの服を着て、長い木製のベンチに腰掛けていた。噂話を静め、私たちの経験からみんなが何かを学べるように、今回の出来事について説明した。詩についての議論にはみんな大笑いし、ボブの「あなた、何をするんですか!」も大いに笑いを巻き起こした。宿舎のホールを出る前に、暴徒事件について私たちはじっくり話し合わなければならなかった。それは私たちが解決しなければならない問題を示していたからだ。すなわち、どんな場合に人は獐猛になるのか、私たちは社会の中の小社会でどのようにして生き抜くことができるのか、私たちは何ができるのか、という問題だ。

この時のために、私たちの収容所の所長——彼はイエス・キリストに教えられた生き方についてゆっくり語る伝道者であった——が締めくくりの言葉を述べてくれた。

「皆さん方は、この事件をその危険性にもかかわらず、こっけいだと思っているようです。その話で楽しむことに害は無いと思います。しかし、ここにいるアーカンソーの隣人たちがあなた方をスパイや危険人物だとみなしているからといって、彼らのことを田舎者だと思っははいけません。私たちの政府は巨額の金を使って国内で最も頭の良い人たちを雇い、国民にそんなふうに行動させるためにフルタイムで働かせているということを忘れないでください。」

私たちはそのことを心に留め、沼を干拓したり、アーカンソーのさらに多くの溝に芝土を入れたりする作業を始めた。